

運転免許は20代までに取るもの、といった誰が決めたのか。しかし遅いデビューにはクルマをじっくり選ぶ楽しみもあるというもの。50年代前半生まれの筆者が、各界のゲストのクルマ生活をのぞき見ながら、社交界へのデビュー服ならぬ、クルマ社会へのデビュー車を考える。今月は鎌倉在住イタリア人画家にして、プレジデントに乗るP. ジェロラさん。

短期集中連載

## どうする デビュー車

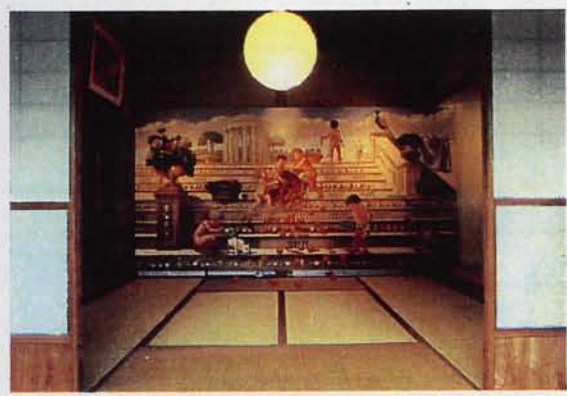
?

2

文=小野郁夫  
写真=野村浩司

[パトリック・ジェロラ]画家。1959年、ベルギーのブリュッセル生まれ。モーリス・ベジャールの20世紀バレエ団などで舞台美術を手がけたあと、つくば万博のフランス・パビリオンのデコレーションのため来日。以来、日本が気に入り住みついてしまった。西浅草のレストラン「ジャルディーノ」に、彼の最新作が飾ってあります。

運転はイタリアに在り、だ。1年に3回もイタリアへ行くという幸運が転がりこんで、その度に北へ、南へ、クルマで移動した。2年前である。助手席から見たところは、クルマ天国だった。アウトストラダーは150km/hでドタドタ走るウーノやパンダでいっぱい。パワーの足りないクルマで高速は疲れるんすよ、なんてこたあ誰も言わない。クルマも、限界まで性能を引き出してもらって嬉しい、とばかりにミシミシと軋んでいる。街中はチンクエチエントの洪水。毀れたボンネットを蝶番と錠をつけて閉めるのや、いかれたサンルーフのかわりにビニールシートを張っただけのものもあった。次の車検で買い換えかな、5年も乗ったし、なんて警沢は誰もしない。クルマも、朽ち果てるまで乗ってもらってありがたい、とはかりに真つ黒な排ガスを撒きちらしていく。ヒトとクルマの関係が、あまりに幸福そうに見えたので、免許を取って運転してみたくなった。



パトリックさんの家と彼自身の作品。日本家屋に西洋画が不思議にハマる。(写真=永竹ひかる)

そつなのだ。イタリアを思えばこそ、教習車の助手席に乗ってる教官の非礼な態度にも耐えられるというものだ。けどさ、あんたみたいな年齢のヒトはAT免許にしたほうがよかつたんじゃないの、って、そりやあ失礼だぞ、おまえ。教官じやなきや、手が出ちやうよ、まったく。ああイタリア、遠い天国。デビュー車はイタリア車かな、やつぱり。なかなか消えない教習中の屈辱を鎮めようとしていたら電話が鳴った。

——何をかうことにした？ ベンツ？ バカ言つてんじゃないよ。え、イタリア？ やめたほうがいいって、苦勞する。ウチの近所のイタリア人入だつて、イタリアには乗ってないぞ。中古のプレジデントに乗ってるぞ。日本車にしなよ。日本車がいちばんいいって——  
イタリア人がプレジデントおつ？!  
最も速いクルマは最も美しくなければならぬ国の人と、日本の役員待遇垂涎自動車。何かスゴく変じゃないか。  
そのイタリア人は、パトリック・ジェロラさんという画家だつた。正確にはお父さんがイタリア人、お母さんはベルギー人で、生まれたのはブリュッセル。日本に来たのが1983年で、今は鎌倉の材木座に古い日本家屋を借りて住んでいる。その家の百坪はあろうかという庭の木の蔭に、ボディがシルバーでトップが黒の日産プレジデント(84年型らしい)が停めてあつた。  
「音を聴いてください。低い唸るような音。エンジンの音を聴かせてくれるのかと思つたら、その大木に葉があるらしく、見上げるとウワアンと蜂の大群である。危ねえ。  
「日本では決まつてるみたいね、こういうクルマには誰が乗つてるのかつて。私、最初にこのクルマ見たとき、ロシアのクルマだと考えた。面白いね、60年代のクルマかかつて。社長さんのためとか、ぜんぜん考えてなかつた。プレジデントを探してたんじやなくて、好きだつた。手に入れたのは偶然です。お友だちが何台かクルマ持つた。そのかたが言いました。じゃあ、ひとつパツチーがだめであまり乗つてない、パトリックは運転が好きだから使つてればつて。そのかたの家に行つてプレジデントを見てびっくりした。そのかたは中国人の実業家、運転手つきで乗つた。タダでもらうわけにはいかないから、買いました。色もすごく良

かった。この形にあつて。4年、乗ってます。私が運転していると、プレジデント見て、必ず、エツ、ナニ？ つてなつちやう。私、それ見るの大好き。譲つてくれたお友だちが、これに乗つてくとね、買い物するときでも高くなつちやつたんだつて。クルマでヒトを見られるから」  
プレジデントに乗ってるイタリア人の画家、と聞いたとき、藤原ヒロシさんのベンツを見たばかりだつたばくは、ミケランジェロ・アントニオーニ監督の映画「欲望」を思い浮かべていた。主人公のカメラマンがぞんざいな感じで乗りまわしていたロールスロイス・コーニッシュだ。無線をつけ、ウッドの蓋がついたクラブボックスにはだかのニコンを放り込む。ところがパトリックさんには、そんな屈折したクルマ選びなんて無縁である。  
「私がプレジデントに乗ってるのは、楽しいクルマだからです。フォルムが美しい。中は広くてきれい。シートも自動で面白い。ジェームズ・ボンドみたいね。疲れない。荷物もいっぱい積める。10年前のクルマだけど、中身はちつとも古くないよ。一度、このプレジデントが動かなくなりました。修理工場で見てもらつたら、ああ、これは終わりですつて。だめ、完全にだめ。私はどうしようと思つた。すごく好きなクルマだから。いろいろ自分でオイル換えたり手入れした。そうしたら大丈夫になつた。動きました。日本はクルマを大事にしないと思ひます。10年も20年も使える、素晴らしいものに」  
ほらね、イタリアには、古いクルマがいっぱい走っているはずである。でも、それにしてもだ、いったい誰がプレジデントは楽しいクルマだと考えるだろうか。プレジデントの後部座席に座つてる社長さんが、プレジデントのフォルムを気に入るか？ そそも、パトリックさんにお会いするや、プレジデントを「クルマ」として見る機会はなかつたかもしれない。間近で見て触れてみると、彼の言うとおり、美しいクルマだ。特殊な用途と販売方法ゆえ、評価の対象にさえなつていないのが不憫に感じられる。が、やつぱり日本人のぼくが、日本の社長さんのためのクルマをカジュアルに乗つてみる、なんて

ことしたら、ハズして結構いいじゃん、ファンキーじゃん、じゃすまないかな、やつぱり。ちよつと勇氣はいるかも。さて、ぼくは何に乗つたらいいんだろう？  
「わからないね。お友だちはみんな、自分のいちばん好きなクルマに乗ってるよ。このヒトにはこのクルマが似合ふ、つて考えたことないから」ですすねえ。そうだろうなあ。

NEWCOMER MEETS  
SIG. PATRICK GEROLA  
第2の助言者  
パトリック・ジェロラ

# ファンキー大統領

最近、友人が愛車のジャガーをぶつけてしまひ修理に出した。代車のカローラで街に出たら、周囲の視線がまったく違つていて、割り込み、幅寄せ、優先無視、すごく意地悪をされる、ジャガーだと絶対そんなことないのに、と嘆いていた。パトリックさんがプレジデントに乗っていると、どうをどうと誰かが道を譲つてくれるので、最初は不思議に思つた。何だかイヤな話だ。けど、デビュー服を選ぶ「J」ガールだつて、「迷つたらブランドに頼る。間違ひなしの5つのシンボル」(「J」93年2月号)だもの。みんなクルマの後ろにズルズルといろんなものを引きずつて乗ることに慣れすぎた。いいクルマに乗つてる方が偉い、こつちのカードのほうが強い、つて、名刺ジャンケンじゃあるまいし。

イタリアがクルマ天国に見えたのは、どんなクルマもクルマであつて、名刺や肩書きじゃない、という単純明快さのためだ。悩まずアクセル踏むだけ。デビュー車選びに迷うなんて、運転したいと思つたそもその動機から、ずいぶんと遠いところに来てしまつたものだ。うーんとか言いながら、デビュー車選びを楽しんでる自分が恐いぞ。

教訓。クルマはクルマ、ヒトはヒト。プレジデントにはグツときた。だけど、ニッポンに生まれたからには、プレジデントに乗りたきや社長になるしかない。もしくは、サーファーか。そうそう、フィレンツェに住んでフィアットのアルジェンタカランチャ・テマに乗れば、パトリックさんと同じ立場になれる。(ちよつと、違う……かも)